

よ！」と褒めてくれたんだ。年をとって考えるよ。

朝日の教員になって幸せだったと思う。でも生まれ変わってもまた一中に行きたいなあと思う。本当にいい学校だったよ。

## 則近彰先生

北海道大学を卒業後、初任として勝山高校に3年、その後朝日高で昭和53年から平成23年、再雇用として更に平成31年までの41年間教鞭をとられた。教科は国語。



昭和53年度  
クラス写真より



令和4年5月21日  
同窓会館にて

インタビューー 山崎 緑 (昭和48年卒)  
機本 馨 (昭和54年卒)

## 【朝日の精神】

平成4年卒業式でのM君の答辞が印象に残っている。彼は1年生のとき朝日にはある種の「冷たさ」を感じたという。し

かし、後になってそれが「自主自律(立)」の表れなのだと彼は悟った。過度な干渉を控え、それぞれ自分の目標とすることろへ気兼ねなく進めという精神、この合理的な誇るべき伝統を在校生はしっかり受け継いで欲しいと結んだ。朝日の精神を示すもう一つの言葉「自重互敬」、これは一見矛盾する言葉の組み合わせだが、ここには「逆説を生きる」という哲学的な目標、真理がこめられていると思う。

## 【朝日を生きる】

前述のM君の卒業式には取材でテレビカメラが入った。大講堂の厳肅な雰囲気の中、式は粛々と進み、送辞に至ってそれまで壇の下から撮影していたカメラが壇上にあがり、送辞を送る生徒の背後から撮影し始めた。そして次に答辞を読もうとするM君にもカメラが寄ってきた。すると彼は一歩下がって言った。「降りてください」。静粛だった会場は更に凍りついたように静まり返った。彼はもう一度言ったがカメラは降りない。すると会場の一点から拍手がおこり、それはやがて波紋のように広がってとうとうカメラは降りざるをえなくなった。カ

メラが降りると彼は徐に答辞を読み始めた。内容は秀逸で読み終えると会場は万雷の拍手。私は「この子は朝日を生きて来たんだなあ」と思った。カメラマンの振る舞いに傍若無人なところがあり、彼は「互敬」に反する姿勢に抵抗の意志を示したのだろう。

## 【悩める男子生徒】

長い教員生活の中では家を訪ねてきた男子もいた。彼らの深い悩みには真摯に向き合った。失恋の深手を負い、六高の池のそばで煙草をふかしながらボーッと思いに沈んでいる男子を見つけ逃してしまったこともある。一方で思いを遂げた者もいた。かつての階段校舎2階の国語研究室にいたとき、すでに始業チャイムが鳴っているにもかかわらず1階から声が聞こえるのを見てみると男子がうつむいて涙を流している。そばにはケロッとした顔の女子。男子の「告白」を女子はバツサリと振ったらしい。ところが何年も経って同窓会でこの二人に会ったところなんと結婚していた。男子の一途さに感心。

## 【強かった女子生徒】

昭和58年生徒会長選に立候補し

た女子のKさんは「朝日は昇らねばなりません」と発し、万最下位の五校戦で今年もそうなら伝統を守って丸坊主にする宣言した。会場は大歓声。その姿を見てみたいの思いか、いや絶対にそんなことはさせないぞとの雄叫びか、果たして、彼女が丸坊主になることはなかった。

## 【もう一度使ってくれんかなあ】

朝日高は大好きだ。一中の歴史を継ぐ名門であり、岡山のエリートを育てているという喜びがあった。こんな学校は他にない、人生をかけてみればおもしろい。もう一度使ってくれんかなあ?(笑)

## 赤いサイレン

写真のサイレンは平成23年度の特別教室棟西側部分の大規模改修に伴って取り外され、朝日高資料室にやってきた。階段校舎時代、サイレンは写真のように特別教室棟の屋根上の小さな小屋内に置かれていたが、新校舎移転で使用されなくなつてからも、しばらくそのままになっていた。

現校舎に移転する際、時報をどうするかということが教員間で論議されたが、やはり朝日高はサイレンでなくては!というので、デジタルサンプリングされたサイレン音を使用するようになった。少し音が高くなったような感じはあるが、通常の時報がサイレンであることは今も昔も変わらない。モーターで風を起こして鳴らす昔ながらの方



階段校舎4階から撮影(平成19年)  
サイレンは↓の場所に置かれていた

式だからタフで、現在もしっかり機能する。製造は「ASAHI ELECTRIC CO., LTD. (朝日電機(株))」(現シユナイダーエレクトリックホールディングス(株))。社名は偶然の一致だが、面白い。